

フランスの映画保存機関における映画関連資料のアーカイビング及び情報技術の活用

東京国立近代美術館フィルムセンター

主任研究員 岡田秀則

1 研修テーマ 映画関連資料のアーカイビングおよびフィルム・アーカイブにおける
情報技術の活用

2 研修期間 平成21年1月5日～平成21年3月5日

3 研修概要

(1) 研修先の名称

- ・シネマテーク・フランセーズ（パリ）
- ・シネマテーク・トゥールーズ（トゥールーズ）
- ・イタリア国立映画博物館（トリノ）
- ・リュミエール協会（リヨン）
- ・フランス国立映画センター アルシーヴ（ボワ・ダルシー [パリ郊外]）
- ・フランス国立図書館・視聴覚部（パリ）
- ・フランス国立図書館・スペクタクル芸術部（パリ）
- ・ゴーモン・パテ・アルシーヴ（サン・トゥーアン [パリ郊外]）
- ・フランソワ・トリュフォー映画図書館（パリ）
- ・アルベール・カーン博物館（ブローニュ・ビヤンクール [パリ郊外]）

(2) 研修の内容

以下の2つの研修テーマに関する各映画保存機関の事業展開について報告する。

映画関連資料のアーカイビング＝■

フィルム・アーカイブにおける情報技術の活用＝□

1 シネマテーク・フランセーズ（パリ） ■

Ginémathèque Française

組織：

1936年にアンリ・ラングロワらが創立した、1901年法によるアソシエーション組織。2005年

に新設されたパリ・ベルシー地区の本拠地（上映ホール・展示室・図書室・資料閲覧室・教育用アトリエとホール・事務所など）のほか、パリ南西の郊外にあるフィルム保存部（通称サン＝シール Saint-Cyr）、本部とセヌ川の対岸にある国立図書館フランソワ・ミッテラン館内の映画技術部がある。2007年に映画文献資料図書館（BIFI）を統合し、現在の職員数は200名以上（うち非フィルム部門は60名以上）。

非フィルムコレクション：

ラングロワの時代から図書室は設置されていたが、1982年にノエル・ジレの尽力により新たな図書室がオープンした。1992年に設立されたBIFIにシネマテーク・フランセーズ、CNC本部、CNCアルシーヴ、国立映画学校（FEMIS）の非フィルム資料が集められ、本格的なカタログ化が開始された。2007年にBIFIはシネマテークに統合。図書室にある文献、写真室のステル写真、国立図書館で保管されている技術資料を除き、すべての非フィルムコレクションはパリ北端にある民間の倉庫（通称：シュニュー Chenu）と重複資料保管室（通称：セヴラン Sévran）で保管されている。詳細は以下の通り。

#非フィルム資料保存課（Conservation non-film）

*電子ドキュメンテーション室（Documentation électronique）

シネマテーク・ド・トゥールーズ、ジャン・ヴィゴ協会（ペルピニャン）など5機関の所蔵資料が統一して検索できる映画関連資料の公開データベース「シネ・ルスールス

（Cine-Ressources）」、そのもとになっている内部用データベース「シネドック3（Cinédock 3）」を開発。現在約25万の人物名データ、約74,000の作品データを有し、クレジット上の同一人物を認識するための専門職員も擁する。作品データ・物語要約文は業界団体「レ・フィッシュ・デュ・シネマ（Les Fiches du Cinéma）」より購入する。デジタル化した資料画像は、著作権の規則を逸脱しない範囲で適宜データベースにアップされる。また新聞・雑誌の映画関連記事の切り抜きをウェブ上で公開、現在までに約2万作品の記事切り抜きが行われた。現在はヨーロッパ各地の映画機関が所蔵する映画フィルムと非フィルム資料を横断的に流通させるためのデジタル・プロジェクト「ヨーロッパ・フィルム・ゲートウェイ（European Film Gateway）」を進めている。

*非フィルム資料保存室（Conservation non-film）

寄贈の受理と寄贈された資料の物理的水準での管理を司る。2005年に実用化された資料運用管理データベース「シヌムーヴ（Cinémouv'）」、寄贈者・寄贈手続進行状況・寄贈容器・寄贈内容の各情報を管理する連結データベースを所有。概念としての「リスト化（inventaire）」と「カタログ化（catalogage）」が厳密に分離されており、寄贈手続がリスト化以前の段階で可能になっているため手続の終了が早い。また資料の展覧会などへの貸与も2003年よりこの部署が専門的に担当しており、借用自体は無料だが借用者には契

約の締結を求める。資料倉庫や寄贈者との間で資料を運搬するため小型トラックを2台所有し、運搬担当の専門職員もいる。

#映画技術課 (Conservatoire des techniques cinématographiques)

映画および映画以前の視覚装置に関連する技術資料（約4,000点）を管轄。かつてはシネマテークのあったシャイヨー宮で保管されていたが、火災発生後の1997年に国立図書館内に移転した。コレクションのベースとなっているのは1959年にラングロワが購入した英国人ウィル・デイ (Will Day) 旧蔵の機材。またフィルム素材の管理に専念することとなったCNCアルシーヴ（後述）からの寄託も受けており、現在は寄贈・購入・寄託によってコレクションを増やしている。カタログ化は1994年に開始し、データは「シネドック3」とは別の内部用データベースで管理されている。また、データ化はされていないが各国の機材メーカーのカタログや文献コピーを集めたファイル、視覚装置に関する19世紀以来のパリ市の公文書と18世紀以来の特許文書コピー、マジック・ランタン公演用の原稿・楽譜も集積されている。現在、マジック・ランタンのプレート（約17,000枚）のデジタル化プロジェクト「ラテルナ・マジカ (Laterna Magica)」が進行中。2008年から、月に一度の映画技術講演会を開催するようになった。映画衣裳（約2000点）と立体物（約1,000点）もこの部署で管轄している。

#文献管理課 (Traitement documentaire)

*ポスター・デッサン・宣伝資料室 (Affiches, dessins et matériel publicitaire)

映画ポスターとそのデッサン（約2万枚）・美術デッサン・衣裳デッサン（計約11,000枚）などを管轄。宣伝資料は長く手つかずだったが最近整理に着手した。ポスターは寄贈と購入によりコレクションの充実を図っており、ヨーロッパでは安定した市場があるため市場価格の調査も行っている。デッサンは美術監督・衣裳デザイナーからの寄贈が主。印刷法の研究を通じたポスターの修復にも着手している。フランスではポスターの著作権はポスター画家に存するものと認められているため（ゴーモン社を除く）、ポスター画家の「作家主義」が成立している。また著作権者の許可を得て随時ポスターやデッサンのデジタル化（月に100枚程度、TIFフォーマットの300dpi=18MB、利用はTIFとJPG大小2種）を推進している。

*写真室 (Photos)

映画関連の写真（アルバムなどの「写真文書」を含む）を管轄。総数約100万枚のうち、カタログ化されたものは約50万枚。物理的には封筒入り紙焼き写真・電子データ・透明ポジティブ (diapositive) などの素材別、また「白黒／カラー」「ポジ／ネガ」やフォーマットなどの種別に応じて分類される。また目的別には、作品写真であれば「スチル写真・ポートレート・撮影スナップ・フィルムコマ抜き・確認写真（ロケハン写真や美術セット写

真など)」の5種、非作品写真であれば「テーマ別（イベント、映画館など）・人物・プレシネマ」などに分類される。この室内と保存倉庫の2か所に分けて保管されている。撮影者の許可を得て随時紙焼き写真のデジタル化を推進しており、すでに約45,000枚をデジタル化している。アルバムの所蔵は約550冊で、うち350冊がカタログ化済み。また5,000枚以上のガラス乾板を所蔵し、これもデジタル化を進めている。後述のイコノテークとの関わりが強く、連結した部署と見なされている。

* 印刷物・視聴覚室 (Imprimés et audiovisuel)

書籍（約21,000冊）・雑誌・映画祭カタログ・学生の論文・VHS&DVDビデオ・ウェブマガジン・ウェブデータベースなどを管轄。書籍はシネマテーク館内書店からの購入もあるので書店との討議を経て購入リストを策定。80%がフランスの書籍、20%が他の欧米の書籍（英米伊西独ベルギー）。購読雑誌は現在125誌。シネマテークのサイト内で所蔵映画雑誌（436種）の紹介を行い、損傷した初期映画雑誌は修復にも着手している。新作映画の紹介資料・記事を用意して図書室で公開。図書室内閲覧用のDVD（VHSと合わせて約6,500タイトル）は文化機関専門の販売業者から購入する。映画祭カタログは現在整理中で本年中に公開を始める予定。またウィル・デイ旧蔵の光学技術関連書籍など著作権切れの貴重書120冊（1503～1931年に出版されたもの）のデジタル化計画に着手。

* アルシーヴ室 (Archives)

目的別の分類になじまない映画人・映画団体の個別コレクション（約140種、約15,000ファイル）を管轄。国立公文書館の文書取り扱い法に依拠した文書の修復も始めたが、修復経費が高いのが悩みである。アクセスは図書室では受けず、職員が常駐で監視する研究者向け閲覧室（Espace Chercheurs）を別に設けている（利用者は年1,700人程度）。この部署の資料はすべて資料倉庫で保管されているので閲覧希望者は48時間前までに申請しなければならない。シナリオもこの部署の管轄である。

* オンライン編集課 (Edition en ligne)

ヴァーチャル展覧会をネット上に構築する2004年新設の部署。資料の読み込みから始め、テーマを定めてから完成するまでに6か月から1年を要する。平均して年に2サイトを構築。最新のものはシルヴェット・ボドロ資料を用いた「スクリプターの仕事 (Le métier du script)」。シネマテークで実際に行われる展覧会とは独立して構想され、完成後も新たな資料を付け加えて「進化」できる構造になっている。またシネマテークのサイト内で、時の企画にマッチした所蔵コレクションの紹介や新着図書を紹介を行う。

図書室：

利用は登録制で、利用者は毎回受付を通る。書籍・雑誌ともにすべて開架を原則とし、検

索用に「シネ・ルスールス」をインストールしたPCを設置（大小JPG画像のうち大きい画像はこのPCのみで見られる）。ただしラングロワ旧蔵文献などの貴重書は資料倉庫にあり、閲覧希望者は48時間前までに申請しなければならない。分類法は複数のシネマテークと共同で考案したものを採用している。コピーは利用者が行う。DVDの閲覧ブース22席、CD-ROM閲覧ブース1席、マイクロフィルムの閲覧ブース1席があり、特にDVDブースの人気の高い。年間の利用者は延べ約25,000人。室内の休憩スペースでは時の企画に合わせたミニ展覧会も行っている。また遠隔地の利用者でも図書室資料にアクセスできるよう、遠隔地向けの電話対応職員をおいている。

* イコノテーク (Iconothèque)

写真・ポスター・デッサンなど複数のカテゴリーにまたがる資料画像を蓄積し、外部からの要望に応じて提供する部署。図書室とつながった受付室を持つ。研究・出版・展覧会など目的別の料金表を定めている。利用者は申請にあたって著作権のクリアをしなければならない例がほとんどであり、権利所有者に関する情報も可能な限り提供する。

収集部 (Délégation aux enrichissements)

映画資料の散逸を防ぐため、受け身ではなく主体的に映画資料の所有者と交渉し、寄贈を推進する新設の部署。ラングロワの伝統を引き継ぎ、映画人との長年にわたる人間関係がベースにある。購入予算もあり、オークションなどで立体資料を購入している。非フィルム部門全体を見通せる立場にあるため常設展（現在の展示品数約440点）の構成も担当している。

2 シネマテーク・ド・トゥールーズ (トゥールーズ) ■

Cinémathèque de Toulouse

組織：

1958年にレイモン・ボルド (Raymond Borde) らコレクターが上映活動を開始したのが端緒。1964年、1901年法によるアソシアションとして正式に設立、1965年にFIAFに加盟。1972年にル・ヴェルネに保存庫を所有する。1981年にボランティアベースの運営に終止符、初の給与付き職員を雇用。1997年に現在の本館（上映施設と図書室）を開館。2004年、郊外のバルマ市に保存研究センターを新設、フィルム（約35,000本）と非フィルム資料を対象とするメインの保存施設とする。職員約30名。

非フィルムコレクション：

保存研究センターではポスター（約5万枚）、スチル写真（約50万枚、映画館で使用された

板付き写真 [photos cartonnées] も多い)、宣伝資料(約7万点)を主に保存している。トゥールーズの中心部にかつてあった映画館ファサード用の手描き大ポスター(ポール・アザイス画、1950年代後半~70年代)のコレクションは特徴的。フィルム・関連資料ともにコレクターや地元の映画館からの寄贈が多いのが特徴。またCNCアルシーヴからの寄託も受けている。2006年頃から徐々にポスター修復に着手しているほか、シネマテーク・フランセーズと歩調を合わせてポスターのデジタル化が進行中。ただし映画人資料、技術資料は少ない。

図書室：

本館2階の図書室には書籍・雑誌を所蔵し、書籍と新しい雑誌は開架で公開。ボルドの収集した雑誌コレクション(特に地方雑誌)に強みを持つほか、国内の映画祭カタログや映画関連機関の資料など、総じてシネマテーク・フランセーズの所蔵が弱い分野が充実している。データベース用PC(2005年よりシネマテーク・フランセーズと共同の「シネ・ルース」に参加)、ビデオ閲覧用PCあり。

展示：

専門の展示室は有しないが、本館1階のロビーを展示空間として活用している。保存研究センターのカタログング職員が展示も担当。

他：

2スクリーンの上映ホールを持つ。フィルム部門では教育映画や地方映像(ミディ=ピレネー地方)、アメリカ無声パレスク映画、1930~40年代フランス映画に強く、上映企画としても地方映像のプログラムを持つ。市民生活に駆け合ったシネマテークとして地元での存在感は大きい。また地方映像についてはデジタル化の計画もある。

3 イタリア国立映画博物館(トリノ) ■

Museo Nazionale del Cinema

組織：

1941年、映画史家マリア・アドリアーナ・プローロ(Maria Adriana Prolo)が映画博物館の設立を目指して映画関連機材の収集を開始し、戦後にいくつかの展覧会を開催。1953年に映画博物館財団を設立するとともにFIAFIに加盟、1958年にはキアブレゼ宮(Palazzo Chiabrese)に博物館を開館させる(すでに図書室あり)。1983年に老朽化のため閉鎖となるが、プローロ逝去翌年の1992年に「マリア・アドリアーナ・プローロ財団」が設立され、2000年には市の中心部にある塔「モーレ・アントネリアーナ(Mole Antonelliana)」の

中に新しい博物館がオープンする。2008年には新しい図書室が開館した。職員数は約40名。

非フィルムコレクション：

あくまで映画の「博物館」としてスタートし、後に上映活動を付け加えたという、多くのシネマテークと異なる歴史を持つ。ポスター（約34万枚）、スチル写真（約86万枚）、立体物・機材等（計約9,000点）などの豊富なコレクションを持つが、それだけに保存場所の確保には現在も苦勞しており、事務室の奥にスチル写真の保存部屋を設けるなど暫定的な保存状態が長年続いている。プローロの関心が映画以前の写真史もカバーしていたため、写真のうち11万枚は映画以前の写真史に属するものであり、写真機材の所蔵も多い。特筆すべきは、チネテカ・ナチオナーレ（ローマ）と共同でイタリア映画スチル写真の第一人者アンジェロ・フロントーニ（Angelo Frontoni、1929-2002）自身から購入した55万枚以上の写真で、契約を交わした上で自由な使用権を得ており、デジタル化にも踏み切っている。また1990年代に英国の映画史家ジョン・バーズ（John Barnes）旧蔵のマジック・ランタン機材のコレクションの寄贈を受けている。

図書室：

正式名「トリノ映画博物館 マリオ・グロモ図書館（Bibliomediateca Mario Gromo）」。
博物館本館と別の地区に設置するという方針のもと、市の南西部のセラオ通りに2008年に移転。書籍（約3万冊）・雑誌（約3,400タイトル）のほか、宣伝資料、映画人・映画団体個別資料（イタラ社、ジョヴァンニ・パストローネ、マルコ・フェレーリ、フランチェスコ・ロージほか）、学生の論文、VHS&DVD（約1万タイトル）・コレクターの寄贈品などからなる。部分開架式で、データベース化されていないものも含め原則としてすべて無料で閲覧可能。書籍の分類法はローマ・ポローニャの各チネテカと共同で考案したもので、イタリア語文献は約40%。1930～60年代のイタリアで大衆的に普及した「チネロマンツォ」（シネロマン）のコレクションが特徴的である。プローロの方針により、映画雑誌以外の雑誌の映画関連記事も可能な限り収集に努めており、約20年分の雑誌記事の切り抜きが蓄積されている。DVD閲覧用PC、ウェブデータベース閲覧用PC、書籍・雑誌の検索用PC（図書室内のみ）あり。コピー機とスキャナーは利用者が扱う。

展示：

2000年に開館した新しい博物館の建物「モーレ・アントネッリアーナ」は、19世紀後半に建設されたシナゴグを改築したもので、現在でもトリノ市街を一望する展望台を有する（高さ167メートル）。市を代表する観光施設として位置づけられており、市民の知名度も高い。階層は「0、5、10、15、18、25」の6つの階に分けられている。学術性・大衆性・映画ファンの心性を同時に満たすようにコンセプトが練られている。

0：入場券売り場、展望台行きエレベーター乗り口、売店、カフェ、団体向けレクチャース

ペース

5：映画の考古学（プレシネマ機材）

10：映画の寺院（2スクリーンで映画を鑑賞できる吹き抜けホール、さまざまな映画セット風の部屋）

15：映画というマシン（映画作りの職能別の資料展示）

18：ポスターギャラリー

25：企画展会場

2006年のトリノ冬季オリンピックに際して「映画の寺院」スペースを大幅に改築、大衆性の高い展示空間が増えた。企画展はこれまでイタリア無声映画、ルキノ・ヴィスコンティ、フランチェスコ・ロージなどイタリア映画を主なテーマとし、ほぼ3か月に一度の割合で変わる。展覧会は各地への巡回も計画する。

他：

約12,000本の所蔵フィルムを活用する上映企画部門（Cineteca）もあり、博物館に近接する同館所有のホール「チネマ・マッシモ（Il Cinema Massimo）」3スクリーンの1つを使用している。あとの2スクリーンは新作を上映。

4 リュミエール協会（リヨン） ■□

Institut Lumière

組織：

1982年に映画批評家ベルナール・シャルデー（Bernard Chardère）により設立。1901年法によるアソシアシオン。1987年に図書室をオープン。映画の発明者リュミエール兄弟の拠点としての土地柄を活かし、リュミエール社関連の技術資料に特徴を持つ。

非フィルム資料コレクション：

1870年にリヨンに拠点を定め、1970年代まで写真材料の製造企業を営んでいたリュミエール家に照準を当て、父アントワーヌ・リュミエールとその息子ルイとオーギュストの発明に関わる技術資料を中心に所蔵。ほかにリュミエール家関連資料（企業資料・家族写真など）・ポスター（約26,000枚）・スチル写真（約8,000組、枚数不明）・宣伝資料（約3万枚）・映画人や映画団体の個別資料（ベルトラン・タヴェルニエ、アルゴス社と製作者アナトール・ドーマン、ジャック・ドレーなど）なども所蔵している。ポスターは裏打ち作業も行われている。

図書室：

利用は登録制。書籍（約9,000冊）・雑誌（約600タイトル）を公開しており、書籍のみ開架。4台の資料検索用PC（図書室内のみ公開、ただし書籍のみウェブ検索可）で、デジタル化されたシネマトグラフ・リュミエールの全映画1,428本も閲覧可能。

展示：

リュミエール工場に隣接する家族の邸宅（3階建て＋地下1階）を改築し、博物館兼事務所としてオープン。シネマトグラフのほか、エチケット・ブルー（Etiquette bleue、乾板感光材）、フォト라마（Photorama）、オートクローム写真（Autochrome）などリュミエール社の発明品、リュミエール家関連写真、プレシネマ機材などを展示。兄弟が世界各地に派遣した撮影技師のうちガブリエル・ヴェール（Gabriel Veyre）に関するコーナーを特設。団体向けのガイド付きツアーあり（有料）。地下にビデオ上映ホールあり。売店あり。かつて開催されたオートクローム写真に関する企画展は海外展開もしている。

他：

8,000本のフィルムを所蔵しており、博物館に隣接するリュミエール社倉庫の跡地に建設された上映施設で定期的に上映活動（子ども向け上映含む）を行っている。上映施設と博物館のあいだ（工場の跡地）には「リュミエール公園」を設置、リュミエール社のさまざまな発明に関する説明看板が立てられている。シネマトグラフ・リュミエールの可燃性オリジナル素材はすべてCNCアルシーヴに寄託済み。映画フィルムの復元は行っていない。

5 フランス国立映画センター アルシーヴ（ボワ・ダルシー [パリ郊外]） □

Archives Françaises du Film-CNC

組織：

フランスの映画産業を監督する国立映画センター（Centre National de la Cinématographie）の映画保存部門として、アンドレ・マルロー文化大臣の指揮のもと1969年に設立。国内で製作された映画フィルムの法的納付先機関。パリ南西郊外のボワ・ダルシー市にある。職員数約90名。

コレクションとその活用：

映画の法的納付制度が定められた1977年以降のすべてのフランス映画、またそれ以前のフランス映画も可能な限り収集・保存しており、長篇劇映画約3万本（うち約50%がフランス製作）、短篇劇映画約2万本（うち約75%がフランス製作）、ドキュメンタリー5万本（うち約90%がフランス製作）となっている。1991年から開始されたナイトレート・フィルム保存計画（Plan Nitrate）は15,000タイトルの不燃化を達成して2006年に終了した。フィ

ルムのデジタル化については、「アルモニー (Harmonie) 」と呼ばれるデジタル・テレシネ (Télécinéma) のシステムを所有、16ビットでスキャンしてTIFフォーマットで保管、適切なフォーマットに変換してテレビやDVD向けに映像を提供しているほか、MPEG4フォーマットに変換して著作権処理の済んだ短篇作品からヴィジオラン (Visiolan) という映像視聴システムで研究者向けの閲覧に供している (現在約4,000タイトルが閲覧可能)。閲覧場所は、ボワ・ダルシーのアルシーヴ本部 (4席) と国立図書館ミッテラン館 (5席) の2か所。非フィルム資料は現在は扱わず、原則としてシネマテーク・フランセーズに寄託している。フィルム現像所を持つ伝統的な映画保存の拠点であると同時に、映像デジタル化の重要拠点でもある。マイナーな規格のフィルムにも対応できるスキャナー「サシャ (Sacha) 」があり、他の映画機関もデジタル復元のために利用している。

他 :

法的に認められたフランス唯一の可燃性フィルムの保存機関である。図書室も有するが原則として職員用である。

6 フランス国立図書館・視聴覚部 (パリ) □

Bibliothèque nationale de France: Département de l'Audiovisuel

組織 :

国立機関。フランソワ・ミッテラン館 (新館) にある。映画フィルムとテレビ・ラジオ番組以外のすべての映像作品の法的納付先機関と位置づけられる。前身の国立音声保存所 (Phonothèque nationale) から発展して1977年に国立図書館の一部となり、ビデオの収集も開始した。職員数約20名。

コレクションとその活用 :

フランス国内で製作されたビデオ、音楽レコードとCDのほか、政府機関製作のビデオ、個人・団体の製作ビデオ、映画祭のみで公開されたビデオ・ドキュメンタリーも対象となる。そのうちビデオについては約17万の所蔵のうち法的納付作品が約15万を数え、平均して毎年6,000から7,000の納付がある。素材はVHSやDVDやCDのほかDAT、ビデオゲーム用ソフトなど多岐にわたる。すでに使用されないBetamax、V2000、VCDなどのフォーマットの映像もある。1999年からはVHS素材のデジタル化にも着手した。館内では著作権所有者の許可を得る必要なく公開が可能で、一般閲覧ブース室 (ホールB、市販DVDを権利付きで購入、3,000作品=ディスク15,000枚、ディスク再生ロボットを使用) と法的納付作品閲覧ブース室 (ホールP、ビデオ約16万本、音声資料約100万、マルチメディア約55,000) を持つ。ウェブ上に公開の総合データベース (Bn-Opale Plus) で検索可能。ネット上での公開は行っていない

い。

7 フランス国立図書館・スペクタクル芸術部（パリ） ■

Bibliothèque nationale de France: Département des Arts du spectacle

組織：

国立機関。1976年に設立された部門で、長らく拠点をアルセナール館（バスチーユ近くの旧館）においていたが、2004年に移転して現在はリシュリュール館（旧館の一つ）にある。

非フィルムコレクション：

第二次世界大戦までの資料を主な対象とする。演劇・サーカス・人形劇・パントマイム・ミュージカル・大衆音楽・舞踊などスペクタクル全般を対象とするため、映画関連資料は一部をなすに過ぎない。ただしフランスの俳優はしばしば演劇と映画（あるいは音楽）などの複数ジャンルにまたがって活躍するため、俳優の個人資料はここに寄贈されやすい（マリア・カザレス、ジャン＝ルイ・バロー、デルフィーヌ・セイリグ、イヴ・モンタンほか多数）。ベースとなっているのは1920年代に寄贈された収集家オーギュスト・ロンデル（Auguste Rondel）の旧蔵資料。また映画人の個人資料としてはアベル・ガンズ、ルネ・クレール、サシャ・ギトリ、ジャン・グレミヨンなど初期映画から古典映画の作家資料が目立ち、事実上シネマテーク・フランセーズとの棲み分けができています。映画ポスターの法的納付先機関でもある。演劇の衣裳は多数所蔵しているが、映画の衣裳はほとんどない。

図書室：

書籍・雑誌など一般的な分類法になじむ資料は、ウェブ上に公開された総合データベース（BN-Opale Plus）で検索可能。映画人個人資料（俳優資料含む）は室内に設置のカタログ冊子を通じてアクセスが可能だが、現在の保存場所はリシュリュール館ではなくミッテラン館なので閲覧には多少手間がかかる。2009年より数年の計画でリシュリュール館の改装工事が行われている。

8 ゴーモン・パテ・アルシーヴ（サン・トゥーアン [パリ郊外]） □

Gaumont Pathé Archives

組織：初期映画の時代からフランス映画史に重要な役割を果たしたゴーモン社とパテ社が共同で設立した、両社製作の作品のみを扱う民間の映画アーカイブ。職員約15名。

コレクションとその活用：

ゴーモン社とパテ社の全ノンフィクション作品（ニュース映画と記録映画）と無声劇映画のみを扱う。両社のトーキー作品および非フィルム資料は各社の本社付き部署（ゴーモン社：ミュゼ・ゴーモン [Musée Gaumont]、パテ社：ジェローム・セドゥー財団 [Fondation Jérôme Seydoux]）にて扱う。フィルム貸出やDVD制作のほか、登録者向けにインターネット上でノンフィクション映画を無料公開している（MPEG2）。かつてゴーモン社はCNCアルシーヴと共同でルイ・フィヤード作品の復元を行ったが、通常はフィルム水準での復元事業は行わず、現在の中心的な事業は所蔵フィルムとともにしたDVD制作である。

9 フランソワ・トリュフォー映画図書館（パリ） ■

Bibliothèque François Truffaut

組織：パリ市の市立図書館の一つ。1960年代後半から映画関連書籍を収集してきた市立アンドレ・マルロー図書館の映画書部門が発展して独立、2001年には新装開館の計画があったん頓挫したものの、2008年にパリ中心部の地下ショッピングモール、フォーラム・デ・アルの中に開館した（市立の上映機関フォーラム・デジマージュForum des Imagesの敷地の一部を改築）。職員は約15名、大学院生のアルバイトもいる。

図書室：

書籍（約19,000冊）と雑誌（購読72誌）は基本的にすべて開架で、フランス語の書籍を中心とする。パリ市立図書館の統一方針により一人5冊まで貸出可能で、その方針のため人気のある書籍は複数購入されている。利用者自らが操作する自動貸出マシンが設置されており、利用者は最初の利用時に必ず登録を行う。DVDのコレクション（約8,000枚）もあり、閲覧席（14席）を持つほか、フランスにはほとんどないレンタルDVDのシステムを導入したことで話題になっている。館名の命名の由来は、トリュフォーの相棒だった脚本家ジャン・グリュオー（Jean Gruault）の個人資料が1993年に寄贈されたことで、特別観覧制度や閲覧席のPCを通じてグリュオー資料も閲覧できる。雑誌記事の切り抜きも旧図書館時代から続けられている。

他：

ビデオプロジェクターを備えた試写室を準備中。なお、隣接するフォーラム・デジマージュは同じ市営の映画関連機関だが、直接のつながりはない。

10 アルベール・カーン博物館（ブローニュ・ビヤンクール [パリ郊外]） □

Musée Départemental Albert Kahn

組織：

オー・ド・セーヌ県の県立博物館。銀行家アルベール・カーンが世界各地へ派遣した撮影技師によるオートクローム写真と記録フィルムを保存する。カーンは世界恐慌のあおりで1930年に破産し、1933年に邸宅とこれら映像資料を差し押さえられたが、1936年にセーヌ県がすべてを買い戻した。半世紀を経て1986年に法的に博物館として認められ、1990年に開館した。

コレクションとその活用：

所蔵資料は1909年から1931年までに撮影されたオートクローム写真（約7万2000枚）と記録フィルム（約17万メートル）からなり、カーンはこれらを「地球のアルシーヴ (Les Archives de la Planète)」と呼んでいた。主要な写真とフィルムはデジタル化されており、博物館内の展覧会で使用されるほか、「常設展」として設置されたPCを通じて閲覧可能である。オートクローム写真は保存上の理由でオリジナルを展示しない方針にしている。

以上の調査を通じて、非フィルム資料についてのさまざまな新しい着眼点を持つことができた。

- * 映画資料は積極的な“プロデュース”がないと忘れられやすい
 - * 映画資料に対する“親しみやすさ”の構築が、映画文化の普及には欠かせない
 - * 映画研究の新展開（資料を用いた実証研究の発展：マルク・ヴェルネ氏の例）→映画保存史の視点も充実する（ローラン・マノーニ氏の著作 *Histoire de la Cinémathèque Française* の例）
 - * 「映画作品の副産物」を超えた“もう一つのアート”の発見
 - * 資料管理の専門家集団を導入することの意味
 - * 非フィルム資料を通じた映画文化の“地方性”の発見
 - * 散逸を防ぐためのキャンペーンの重要性
- また、デジタル技術を用いた映画や映画資料の公開についてもさまざまな方針の立て方があることが分かり、日本における今後の議論に有意義なものとなった。

結びに：

マリアンヌ・ド・フルリー氏（シネマテーク・フランセーズ非フィルム資料収集部長）

「フィルムより注目されないのが不安でしょうが、自分の仕事を信じて前進してください。将来フィルムがなくなる日が来ても、非フィルム資料だけは本物ですから」。